

外部評価委員会報告書

～平成18年度事業事後評価～

平成19年5月31日

① 研究所組織・運営上の進捗

	コメント
<p>a. 研究所の目的、理念に合致した運営を行っているか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・効率的な組織改革がなされ、今後が期待される。 ・目的、理念いずれも充分合致していると考ええる。 ・新しい運営形態で重点テーマが良く見える形で運営を行っている。また各プロジェクトも重要性の高いテーマ設定を行っている。 ・研究業務だけでなく、行政対応の各種事業、委員会や情報発信においてバランス良くかつ高いレベルで実績を上げている。 ・行っている。 ・行っていると判断される。 ・従来の部、室からプログラム、プロジェクトへの変更は、単なる名前の変更であってはならない。各部門の有効なコミュニケーションが重要であり、その充実が試みられていることは評価される。 ・以前に比べ研究所の組織が現状の健康や栄養の問題に即した内容に整理され運営されていると思う。 ・新組織としてがらっと変化したことに驚きました。各プロジェクトの情報共有は、有益であると思います。
<p>b. 十分な研究及び業務の成果が出せるような運営を行っているか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトの体制で研究業務が行いやすくなっていると想定される。 ・プログラム内での可能な役割が広がり、責任と共に内容が深まっている。 ・少人数で大きな成果が出ているので、運営の状況は良いと思う。 ・新運営組織によりプロジェクトが見やすく、進めやすい組織となっている。 ・組織を単純にし、しかもプログラム単位でオンラインで管理することができる仕組みを構築しつつあることは、効率的・効果的な研究所運営に今後大きな貢献をするであろう。 ・適正な運営が行われている。 ・理事長のリーダーシップの下に、プログラムリーダーや事務部が責任を持ち、運営は研究及び業務の成果が出せるようになされている。 ・ある程度一貫性をもった研究の継続がなされることを望む。 ・事務部門の研究への対応及び人員体制等の整備が行われたことは評価できる。 ・思い切った組織改編がなされ、朝のプロジェクトリーダー会議、外部も交えたイブニングトークなど連携がとりやすい運営だと思います。ただ、研究の時間がとれるのか、心配になります。
<p>c.その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・流動的研究員、職員の運用方法を今後はどの様に運用していくのが重要と感じられた。 ・正規の職員以外に多くの人材を集め、かつ研究職員と事務職員を融合させる努力が、研究所のレベルの高い多くの成果を上げるのに貢献している。また、外部資金が多いことも特筆すべきである。 ・特に問題点なし。 ・旧組織の部長及び室長の処遇に対して、問題は出なかったのか。 ・事務部門の整理、研究職との垣根を無くす努力。それぞれの意識改革が感じられました。

② 6プログラムにおける研究の進捗状況、成果発表の状況

	評点(1~5点)	コメント
臨床栄養プログラム	<p>a. 計画・実施の適切性 [4・5・4・4・5・5・5・4・5]</p> <p>b. 達成状況 [4・5・5・5・5・5・5・4・3]</p> <p>c. 成果の発信 [4・5・5・5・5・5・5・4・4]</p> <p>d. 運営方法 [4・4・4・4・4・4・5・4・4]</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人種特性の情報に関する部分に若干進展が見られている。 ・優れた研究であるが、どこまでがこれまでの成果で、どこからが今年度か分りにくい。 ・ヒト遺伝子の倫理審査は、所内で対応できているか。 ・東京大学との共同研究の現状は？プロダクトはどのように分けているのか？ ・メタボリックシンドローム、栄養療法プロジェクト2つとも成果は高い。 ・糖尿病予防の点からも成果は高い。 ・ヒト、モデル動物を組み合わせ着実に研究を進展させている。 ・糖尿病に関して、血管内皮機能改善の可能性を示唆した成果は高く評価される。 ・優れた成果が得られている。 ・報告された新知見は、大変興味深かつ有意義なものと思われる。今後、是非ヒトを対象とする研究に進めてほしい。 ・プログラムリーダーが併任であるが、運営は円満に行われているでしょうか。 ・基礎、臨床両面より緻密に訂正された実験がなされ、レベルの高い業績が得られている。 ・現在はまだ遺伝子レベルの研究や動物実験が主であるが、重要な研究であり、評価できる。引き続き人体レベルの研究へつなげ、研究成果が実践で使えることを期待する。 ・人種を越えた興味深い内容です。 ・日本人が小太りでインスリン抵抗性を有すること、食事療法で改善できることなど、臨床への展開を期待します。
栄養疫学プログラム	<p>a. 計画・実施の適切性 [4・5・5・4・4・4・5・4・5]</p> <p>b. 達成状況 [4・5・4・4・4・4・4・4・3]</p> <p>c. 成果の発信 [4・5・4・5・4・4・5・4・4]</p> <p>d. 運営方法 [3・4・4・4・4・4・4・3・4]</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト間で多少分野は異なるかもしれないが、栄養摂取と全体指標との関連が把握しやすくなると思われる。 ・論文掲載が多く、優れている。 ・国民健康栄養調査の集計は委託できないのか。負担が大きすぎる。 ・一般的な疫学中心の調査をうまくまとめている。これから良い成果が出そうだが、多くのテーマに拡がりすぎている。 ・日本人の遺伝的特徴を幅広く明確にし、それに基づき成果を上げており、今後の進展を期待する。 ・厚労省の事業の受け皿であり、成果が期待されることが大きい。 ・多岐にわたる内容の研究を意欲的に推進していることは評価される。 ・本研究所のタスクとしては必須のプログラムであり、成果は順調に上げられているが、内容が多岐にわたり、深みに至れない懸念もある。 ・多岐に渡り重要な研究が進められていると思うが、更に性、年齢など幅を広げた対象での研究へつなげてほしい。また、信頼性の高い情報の発信を期待する。 ・ヒトを対象とする食事摂取基準、国民健康栄養調査業務や多岐に渡った調査を、実践の栄養改善運動につなげてください。

<p>健康増進 プログラム</p>	<p>a. 計画・実施の適切性 [5・5・4・4・4・4・3・4・4]</p> <p>b. 達成状況 [4・5・4・4・4・5・2・5・3]</p> <p>c. 成果の発信 [3・4・5・4・4・4・2・5・3]</p> <p>d. 運営方法 [4・4・5・4・4・4・2・4・3]</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な運動量と方法について指導が可能な方向性で、プログラムが遂行されている。 ・運動基準というガイドラインにまとめられ、実践的で良い。 エビデンスを伴っていて良い。エビデンスが運動基準の見直しの資料として生かせるかが課題となる。 ・2割減という結果はクリア。筋力トレーニングのスロートレーニングでも有効など、おもしろい成果あり。 ・スロートレーニングの提言は重要である。 運動基準やエクササイズガイドの社会での認知度は、栄養・食品に係わるものと比べて少ないと思うので、更なる情報発信を希望する。 ・「運動基準」作成への貢献は高く評価される。 今後は日本人を対象とした大型研究の一層の推進が期待される。そのためには、マンパワーの確保、効率的な運営が望まれ、普及活動と研究活動のバランスにも留意してほしい。 ・研究内容に独白性が乏しくまた、達成成果も不十分である。 日本人のエビデンスづくりについてもその推進について疑問が残る ・運動ガイドライン及びエネルギー代謝プロジェクトの成果は評価できる。休養プロジェクトに関しても同様な成果が出るように研究を継続してほしい。 ・メツの具体的なカウントの仕方が分かりにくいと思いました。是非わかりやすい言葉と方法で、一人一人に伝える努力を。
<p>栄養教育 プログラム</p>	<p>a. 計画・実施の適切性 [5・5・5・4・4・4・5・4・3]</p> <p>b. 達成状況 [4・5・4・4・4・4・3・3・3]</p> <p>c. 成果の発信 [5・4・5・4・4・4・4・3・3]</p> <p>d. 運営方法 [4・5・5・4・4・4・4・3・3]</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・実践の場におけるプロジェクトは成功裏に行われている。肥満については、個人レベルでの解析を進めてほしい。 ・実践性があるよ。行動変容プログラムの作成には心理専門職が入っているか。意識の変容の評価は？遺伝解析の倫理は？どの様な委員会で行われているのか。 ・小規模グループの割には良い成果を上げている。特に対外活動など外との交流がうまく作動している。 ・医師、保健師、栄養士、運動指導士等によるチーム形成や摂食・嚥下障害研究交換会の開催など、適時適切な取り組みを行っている。 ・これからのプログラムであり、成果に注目したい。 ・教育効果を短期的に評価することは難しいので、長期的視野での研究が必要と思われる。 ・「栄養ケアマネジメント」は有望なプロジェクトである。 ・食育の評価を何故行うのか疑問に思った。どのプログラムもどの時点で評価するかで結果が異なるので、十分な検討が必要であると思う。 ・食育プログラムは、実践こそすべてだと思います。是非成果を。 具体的達成目標、評価法が見えにくい。これから重要になる分野だと思いますので、今後の成果が楽しみです。

<p>基礎栄養 プログラム</p>	<p>a. 計画・実施の適切性 [4・5・4・4・5・4・4・4・3]</p> <p>b. 達成状況 [4・4・4・4・4・4・3・4・3]</p> <p>c. 成果の発信 [3・4・4・3・4・4・3・3・3]</p> <p>d. 運営方法 [4・5・4・4・4・4・4・4・3]</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・遺伝子レベルでの解析は引き続き進めてほしい。脂肪肝については、興味ある成果が得られているため、人へ広げてほしい。 ・モデル動物を用いての研究も意義が大きい。 一年分の成果のまとめとしては理解しやすかった。 アウトプット・インプットともに妥当な線と考える。 ・普通のマウスでは運動で脂肪が取れる。脂肪組織を取り除くには魚油は肝細胞 VCP2 を増加させ肥満を抑える。肝臓の VCP2 脂肪を抑える等々、おもしろい成果を出しているが、これからはおもしろそうである。 ・運動による脂肪減少における筋肉の役割・メカニズムの解明に係る研究は、生活改善の基礎情報として重要であろう。論文が少ないのは何故か。 ・基礎的なデータの作成に敬意を表する。 ・研究内容には興味を持てるが、まだ模索的段階であり、今後の展開の方向性が未だ見えてこない。 ・人体レベルの研究に繋がるような基礎研究になっていることは評価できる。動物レベルから人体レベルの研究へ更に進めてほしい。 ・基礎研究(ノックアウトマウス)は何のための研究か？運動できない人への抗肥満抗血糖効果を脂肪肝の種類によって治療が異なる人間に適応できるのかは分からないのでは？即、実践につながらない研究では。ヒトでの効果を期待します。
<p>食品保健機能 プログラム</p>	<p>a. 計画・実施の適切性 [3・5・4・4・4・4・2・4・4]</p> <p>b. 達成状況 [4・5・4・4・4・4・2・3・4]</p> <p>c. 成果の発信 [4・5・5・4・4・4・3・3・3]</p> <p>d. 運営方法 [4・4・4・4・4・4・2・4・3]</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・目標が大きい場合に、方法論を併行してトライする方が良いでしょう。将来的に分析項目は新規な対象にせざるを得なくなるのではないのでしょうか。 ・厚労省からの依頼作業として行政的意義を評価してよいのか。分析依頼者から届く命令系統が不明(質疑応答にて解決)。生理活性成分の研究はアカデミックな価値が高い。 ・ある一定量の試験をこなしている。補完成分ではビタミン E の有効性アンケート調査等適当なテーマを対象にしている。 ・特定保健用食品関連業務を行いつつ研究もきちんと行っている。 ・Toc-3 の研究がこれからどのように結びついていくかに関心がある。 ・食品成分解析は必須である。基礎研究分野でのコネクシンへ注した理由が不明瞭である。研究計画立案に問題がある。 ・日本ではガンに対する食品成分の効果があまり示されていないので、その成果を期待する。 ・「いわゆる健康食品」に関する市民の関心が高いことには驚きます。メディアの力によるところが大きいですが、一般人は自然界の周囲の動植物を食べて生き続けまた、一基本を忘れてしまって情報に振り回されていて、もったいないことです。

③2センターにおける業務の進捗状況、成果の社会等への還元状況

	評点(1~5点)	コメント
情報センター	a. 計画・実施の適切性 [4・5・4・4・4・4・4・5・4] b. 達成状況 [4・4・4・4・4・4・4・4・3] c. 成果の発信 [3・5・5・4・4・4・4・4・4] d. 運営方法 [4・5・4・5・4・4・4・4・4]	<ul style="list-style-type: none"> ・情報発信については努力が認められますが、テーマまたは項目によっては内容的にバラツキがあるように思われます。 ・いろいろな媒体について、十分な発信が行われている。 ・問い合わせについてはどの様に対応、受け付けをしているのか。 ・サーバーや保守についてはどこから予算がついているのか。 ・健康食品安全情報ネットの作動を行っているのは重要であろう。 ・業務の情報発信をきちんと出している。 ・少人数でのデータベース、HPの充実を高く評価する。 ・適切に情報交換の発信を行っている。 ・国民に対する影響力は大きいと思うが、国民からのフィードバックを把握する必要はある。それによって費用的効果を検討する必要がある。 ・順調に研究が推進されていると考えられる。 ・健康食品等への信頼できる情報発信元として、業務を遂行してほしい。 ・えいようきつと食育の関連はどう検討されているのか疑問に思った。 ・速報性、信頼性、評価性はどうか。 ・問い合わせに関するサービス、メディア対応、IT支援(2007.3月～キッズページ)を、19年度はエクササイズも含めて充実させたい。
国際産学連携センター	a. 計画・実施の適切性 [4・5・4・4・4・4・5・5・4] b. 達成状況 [4・5・4・4・4・4・4・5・3] c. 成果の発信 [4・4・4・4・4・4・4・4・4] d. 運営方法 [4・5・4・4・5・4・4・4・3]	<ul style="list-style-type: none"> ・英語版の情報作成発信については、良い方向性にある。 ・様々な業務のニーズを発見して意欲的な取り組みを行っている。 ・研究成果の発信も課題であろう。英語版の情報作成発信については、良い方向性にある。 ・いくつかの国際協力、NRの認定を展開しているのは評価できる。 ・大塚製薬との位置づけは、今後グレードアップした形が望ましい。 ・英語版HPの充実に向けた努力は評価される。 ・NR、管理栄養士など人材育成に貢献している。 ・寄付プロジェクトは特徴的。 ・「国際産学連携センター」の名称からの印象では「国際的な産学連携を行うセンター」と受け取れる。 ・発表されたものをみると「国際」連携と「産学」連携のセンターである。 ・人材育成は順調にすすんでいると思われる。大規模な国際共同栄養調査のようなプロジェクトの準備が望まれる。 ・諸外国において日本食が注目されているなか海外への情報発信も積極的に行ってほしい。 ・NRのフォローアップを引き続き行ってほしい。 ・国際交流(貢献)は大変意義のあることだと思います。国際栄養分野へのリーダーシップをとってください。 ・NRは期待しています。管理栄養士研修(公衆栄養担当者不足)も期待しています。

④ 研究所全体としての中期目標・計画に関わる事項の進捗

	評点(1 ～5点)	コメント
a. 年間の論文及び学会等での研究成果の発表の状況	5・5・4 5・5・5 4・5・3	<ul style="list-style-type: none"> ・成果発表については、大変よく努力されている。 ・人数の割に報告数が多い。 ・評価できる成果が出ている。 ・原著論文等が数値目標を大きく上回っている。招待講演が非常に多い。一人あたりの論文数が研究独法中1位であることは高く評価する。 ・発表・論文等も十分と判断する。 ・論文の質の評価は難しく、どこの研究機関でも課題となっている。それらも視野に入れて今後、質的評価を取り入れる工夫をしてほしい。 ・論文件数のみならず、質的評価も必要と思われる。 ・評価できる。数だけでなく内容の評価も。 ・論文の質は評価。論文数はばらつきがある。
b. 研究成果の社会への還元状況(セミナー、ホームページからの情報提供、知的財産の活用等)	4・5・5 5・5・4 4・4・4	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネット、講演会等を通して成果還元は十分に達成している。 ・新しい取り組み等を工夫している。 ・優れた成果と活動を行っている。 ・データベース、HP の充実はずばらしく、そのことは90%以上の人が満足していることに反映している。 ・セミナーやホームページからの社会への還元は活発に行われているが、その影響についてのフィードバックもする必要がある。 ・順調に推進されている。 ・一般向けセミナーから専門家向けセミナーの開催は、限られた人員の中で対応として評価できる。 ・HP の情報提供(健康食品等)は充実していると思います。ただ、これだけの内容を一般人は読み取れるのかと思うこともあります。
c. 他の機関との連携の状況(連携大学院、共同研究、国際協力、人材育成等)	4・5・5 4・5・4 2・4・4	<ul style="list-style-type: none"> ・可能性のあるつながりを試みているのが良い。 ・研究生を積極的に受け入れているのは高く評価できる。 ・共同研究の増加、大学との連携等外部との連携に実績を上げている。 ・他大学との連携も十分と判断する。 ・共同研究の増加、大学との連携等外部との連携に実績を上げている。 ・共同、連携の成果が見えてこない。 ・成果の上がる研究が行えるよう今後も他機関との連携を期待する。

⑤ 総合的な評価

- ・小さい組織であり、正規職員が少ない割に成果は良好である。本研究所の行っている調査業務は国内的にも国外的にも重要な役割を果たしている。コマーシャル等で大きく取り上げられている運動器具と健康との係わりについて、正しい情報を求めることは、本研究所の役割でしょうか。
- ・人員が少ない割に大きな研究成果が上がっている。組織運営が極めて好ましい状況にあることが推察される。目標値がさほど高くなく、研究者に対する心理的圧迫があまりないことが、良い方向に向かっているのではないかと考える。計画通りではなく、何か途中で良いアイデアができたときは、流動的に動けるようにできる工夫があると良いと思う。年次計画は厳しいのではないかと。研究は3年単位くらいでまとまっていくので、プログラムによって事前・中間・事後などフェーズをかえて評価するというやり方もあるのでは？
- ・小型の研究所としては十分な本分野での指導的な役割を果たしている。ただし、産学連携の戦略はよくみえない。NR の評価システムはニーズに対しての良い対応として高く評価でき、このような活動は積極的に行うべきであろうし、システム化が望まれる。
- ・多くの行政ニーズに対応の業務を行いつつ、研究について質・両ともに高い実績を出しており、社会的貢献度は大きい。6つのプログラム、2つのセンターが機能し、順調に研究所の業務が進歩している。「運動」に係る情報発信の充実を期待する。
- ・少ない人数で守備範囲の広い課題をこなし、行政ニーズにも応えて、所期の成果を上げていと評価したい。今後、食事摂取基準の改定に向けて業務を遂行するための課題も多く、これからの成果に期待したい。
- ・プログラムリーダーに大幅な権限を与え、プログラム内の情報交換を密にした組織作りが良く機能し、研究活動や社会への還元が活発に行われたと広く評価される。公表された論文も質的・量的に目標を上回っていると思われる。
- ・基礎的研究の内容がやや不満足なものがあるように思える。他の機関、大学との積極的な共同研究が望まれる。
- ・総合的にはよくまとまっていると思う。今後は各プロジェクトでの成果だけでなく、いくつかのプロジェクトによる共同研究による計画も検討してほしい。
- ・東アジアの中心として5年後の成果を見越して(期待して)評価すること、また中間評価として1年ごとに見るのは、無理があります。「60年以上も続く国民健康・栄養調査の集計業務、評価→これに基づく食事摂取基準算定→国民の健康の維持・向上につなげる。それが人々に実践され、健康で幸せな生活が保証される」この地道な業務だけでも大変な苦勞だと思います。現実にはメタボリックシンドロームという名称の定着、食育基本法、健康増進法等の法律制度、食事バランスガイド作成等さまざまな動きはあっても、医療費は増大し病人は増加し(糖尿病他)・・・「健康日本21」の目標も目標倒れに終わりそうです。基礎研究や基礎調査が国民一人一人に生かされてこそ(行動変容も難しいですが)、研究機関が役立つ場であると考えます。オーダーメイドの栄養学も“一人一人に実践されてこそ”ですね。メディアとの上手な連携プレー、学際領域を広げた研究に改善のヒントがあるのではと思うことです。

独立行政法人国立健康・栄養研究所外部評価委員会委員名簿

平成19年5月現在

氏 名	所属・職名
○ 五十嵐 脩	社団法人 栄養改善普及会会長 お茶の水女子大学名誉教授
伊藤 裕	慶應義塾大学 医学部教授
加藤 則子	国立保健医療科学院 生涯保健部長
逢坂 哲彌	早稲田大学理工学術院 教授
川島 由起子	聖マリアンナ医科大学病院 栄養部長
加賀谷 淳子	日本女子体育大学 客員教授
林 徹	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所 所長
豊田 正武	実践女子大学 生活科学部教授
三保谷 智子	女子栄養大学 出版部 編集委員

○ :委員長